

広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業
(カップリングインターンシップ)

- | | | |
|-----------|--|----------------|
| 1. インドネシア | : PT Komatsu Indonesia (小松製作所) | 2014/8/14~8/27 |
| 2. マレーシア | : Chiyoda Malaysia (千代田化工建設) | 2014/8/17~8/30 |
| 3. カタール | : Chiyoda Almana Engineering (千代田化工建設) | 2014/8/23~9/ 6 |
| 4. ベトナム | : Fujikin Bac Ninh (フジキン) | 2014/9/ 7~9/20 |
| 5. インド | : ISGEC Hitachi Zosen (日立造船) | 2014/9/14~9/28 |



行事報告

広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業—CIS 活動報告(インドネシア)

広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業運営委員会 委員 菅 哲男
接合科学研究所 客員教授

本年度 1 ケ国目の CIS(カップリングインターンシップ)を、8月14日~27日の期間にインドネシア(ジャカルタ)で開催しました。大阪大学外国語学部2名、工学研究科2名、インドネシア大人文学部2名、工学部2名の計8名の学生が参加しました。現地では2日間の事前研修を行い、企業の経営理念やコミュニケーションの講義(講師：言語文化研究科の横江特任教授、原准教授)、溶接基礎知識の講義(講師：接合研の田中教授)などを受講し、18日から5日間の企業実習に臨みました。実習先のコマツインドネシア社(建機会社、小松製作所の子会社)で、会社説明(方針、組織、業務内容、安全管理)を受けると共に、現場見学(接合プラント、油圧シリンダープラント)や、CISの課題に関する現場

指導者へのインタビューなどを行いました。学生は、課題として「生産効率の向上」や「現場における安全管理」などを設定し、その問題解決策について全力で取り組みました。最終日の26日には、コマツインドネシア社で、学生は課題の検討結果についてプレゼンテーションを行いました。最終報告会は、コマツインドネシアのHaryanto社長、インドネシア大学のJunaidi国際部長、大阪大学の菅客員教授ら計35名の参加があり、盛況裏に終了しました。コマツインドネシアからは、対策は実践に大変役立つ提案であるとお褒めがありました。文理融合と日本学生と現地学生の融合でのインターンシップの試みは簡単ではありませんが、その挑戦の一環として、今回の活動は価値あるものでした。



行事報告

広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業—CIS 活動報告(マレーシア)

広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業運営委員会 委員 菅 哲男
接合科学研究所 客員教授

本年度 2 ケ国目の CIS(カップリングインターンシップ)を、8 月 17 日~30 日の期間にマレーシア(クアラルンプール)で開催しました。大阪大学外国語学部 2 名、工学研究科 2 名、マラヤ大学言語学部 2 名、工学部 2 名の計 8 名の学生が参加しました。現地では 2 日間の事前研修を行い、企業理念やコミュニケーション手法の講義(講師：言語文化研究科の米田教授と藤原特任助教)、溶接基礎知識の講義(講師：接合研の菅客員教授)などを受講し、21 日から 5 日間の企業実習に臨みました。実習先の千代田マレーシア(エンジニアリング会社、千代田化工建設の子会社)で、会社説明(方針、組織、業務内容)を受けると共に、EPC(設計、調達、建設)業務に関する実習などを行いました。EPC 実習プログ

ラムは、今回オリジナルに企画されたものであり、業務把握の点で大変効果的なものでした。その後、サブコンのイースタンソルジャー社での企業実習(特に溶接)やペترون社の製油所見学などの日程を重ね、最終日の 29 日にはマラヤ大学で、学生は CIS の課題(「職場において求められるソフトスキルは何か」など)について発表しました。最終報告会は、千代田マレーシアの Shaiful 社長、マラヤ大学の Noor 工学部長、大阪大学の東外国語学部長ら計 19 名の参加があり、成功裏に終了しました。学生からは、「チームの力を集めて課題解決することやコミュニケーション力が重要だと感じた」などの感想もあり、「コミュニケーション力や問題解決能力の育成」の面で、大変有意義な活動でした。



広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業—CIS 活動報告(カタール)

広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業運営委員会 委員 勝又 美穂子
接合科学研究所 特任准教授

2014年8月23日～9月6日の期間で本年度3カ国目のCISをカタール・ドーハで実施しました。大阪大学外国語学部アラビア語専攻から2名、工学研究科から2名、カタール大学工学部から4名の学生が参加しました。最初の2日間で日系企業の製造業における理念、生産性向上のための多様な活動、コミュニケーションの基礎等について講義を行いました。カタールの文化交流を挟み、休日を除く8月28日～9月2日の期間には千代田アルマナ（千代田化工）で「グローバル化・多文化環境で働くこと」という課題の下、エンジニアリング企業のビジネス活動に関する講義、グローバルリーダー（スマートマネージャー）に必要なもの、プラント建設に係るエンジニアリング業務の疑似体験、ソフトスキル向上のための実習など実践に基づく様々な内容を学びました。9月4日にはカタール大学にて最終報告会を開催し、在カタール

日本大使館津田特命全権大使、千代田アルマナ井川社長、カタール大学 Mazen 副学長を始め、その他大使館職員、千代田アルマナ社員、カタール大学教員・職員が参加しました。大阪大学からは接合研の片山所長、近藤（勝義）教授、言語文化研究科からはアラビア語専攻の近藤（久美子）教授、依田講師、横江特任教授他、カタール現地マスメディア等総勢30名程度の参加があり盛大な報告会となりました。津田日本大使からはCISが人材育成に力を入れるカタールの一助となり、カタールと日本の更なる関係強化に繋がるだろうとのご挨拶がありました。CISの活動では初めてとなる中東地域での実施には、多くの困難が予想されましたが心配をよそに、学生同士非常に硬い友情関係を築き、「グローバル化・多文化環境で働くこと」という課題に対し身を持って答えを見つけることが出来たようです。



行事報告

広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業—CIS 活動報告(ベトナム)

広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業運営委員会 委員 菅 哲男
 接合科学研究所 客員教授

本年度 4 ヶ国目の CIS(カップリングインターンシップ)を、9月7日~20日の期間にベトナム(ハノイ)で開催しました。大阪大学外国語学部2名、工学研究科2名、ハノイ工科大学情報工学部2名、工学部2名の計8名の学生が参加しました。現地では2日間の事前研修を行い、企業の経営理念やコミュニケーション技法の講義(講師:言語文化研究科の横江特任教授と清水准教授)などを受講し、11日から5日間の企業実習に臨みました。実習先のフジキン・バクニン(精密機器会社、フジキンの子会社)では、会社説明(方針、組織、事業内容)を受けると共に、実習(バルブの組立と溶接)と関連の会社(フジキン・ベトナム、ヤマザキ・テクニカル)の工場見学を行いました。また、フジキン・バクニンの

川端社長による「ベトナムにおける外資系企業の役割」についての講義を受け、CISの課題である「ベトナムの将来について何ができるか」について質疑応答をしました。大きなテーマですので、取りまとめは簡単ではなかったのですが、学生は全力で取り組みました。最終日の19日には、フジキン・バクニンで、学生はCISの課題とその対策についてプレゼンテーションを行いました。最終報告会には、川端社長、ハノイ工科大学の Hanh 接合科学部門長、接合研の菅客員教授ら計16名の参加があり、企業からは丁寧なコメントもいただきました。学生は、今回のCISを通して「ものづくり現場」の就業体験をすると共に、コミュニケーション力や問題解決力を学んでおり、価値ある活動でした。



広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業—CIS 活動報告(インド)

広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業運営委員会 委員 勝又 美穂子
接合科学研究所 特任准教授

2014年9月14日～9月28日の期間で本年度5カ国目のCISをインド・グジャラート州で実施しました。大阪大学外国語学部ヒンディー語専攻から2名、工学研究科から2名、インド工科大学ハイデラバード校工学部から2名、人文学部から2名の学生が参加しました。デリーから飛行機で西へ2時間のバドーダラへ移動、更にバスで2時間のバルーチという町の宿泊先にて、日系企業理念、製造業の取り組み、コミュニケーションの基礎などについて事前研修を実施後、休日を除く9月18日～9月24日の5日間はISGEC/Hitachi Zosen（日立造船インド合弁企業）にて実習を行いました。学生は「多文化、多言語環境におけるコミュニケーションの問題」という課題の下、ISGEC/HITZの各幹部から合併前と合併後の変化、日本人とインド人が一緒に仕事をする事、マネジメントとは何か、インドが抱える問題等について個人の経験を元にした講義を受け、また各部門の詳細な業務、部門間の業務の流れについても学びました。更に、各部門責任者へのインタビュー、製造現場での溶接実習や作業員へのインタビュー

も経験し、現場から経営に至るまで異なる立場の社員の考え、業務について肌で学びました。9月26日にISGEC/HITZで開催された最終報告会にはISGEC/HITZのSanjay社長、Rai執行責任者、竹中取締役、Ranjan人事部長他2名、IITHからはスカイプにて2名の教員が、またIITHへ支援を行っているJICAから1名、大阪大学言語文化研究科ヒンディー語専攻高橋教授らが参加しました。Sayjay社長やRai執行責任者からは初めて気づく社内の問題点もあり大変参考になった、短い期間でここまで調査し、提案をまとめ上げたことに驚いているとのコメントがありました。また、竹中取締役からは、仕事を行う上で最も重要なことは人間関係であり、ビジネスの成功、技術の向上などはその後自然について来るものであるため、今回築いた日本人、インド人の学生との関係を末永く保って欲しいとの貴重なコメントを頂戴し、CIS活動の締めくくりとなりました。インド僻地での滞在でしたが、企業からの温かいご支援により皆体調を崩すこともなく最後までやり遂げました。

